

琉球使節の江戸上り

西 羽 晃

江戸時代の沖縄は琉球国と称する独立王国でした。しかし薩摩に属しており、中国にも属する複雑な関係にありました。琉球国王即位の際に派遣される謝恩使と江戸幕府將軍就任の際に派遣される慶賀使とがあって、両者を合わせて琉球使節と称しています。江戸時代に 18 回あり、琉球国の王子が正使となり、薩摩藩士が付き添って江戸まで往復しました。これを「江戸上り」と言っています。最初は東海道を通り、桑名と宮（熱田）との間の七里の渡しを渡っています。朝鮮国でも「朝鮮通信使」といわれる使者が江戸へ来ていますが、最初から東海道の草津から中山道を通り、垂井—大垣—墨俣—起—稲葉—清須—名古屋の美濃路を通り、宮から再び東海道を通っています。すなわち七里の渡しを渡っていません。

前回に書きましたように、琉球使節は寛文 11（1671）年 8 月 27 日に七里の渡しで暴風雨に遭難して、知多半島に流された事件がありましたが、その後の天和 2（1682）年、宝永 6（1709）年、宝永 8 年に桑名を通っているようです。

しかし、その次の正徳 4（1714）年には桑名を通らず、美濃路を通っています。『尾西市史 資料 起宿交通編』所収）には「琉球人美濃路初」とあり、以後も起宿の資料にしばしば記載されています。寛政 3（1791）年に琉球使節が帰国に際して、美濃路墨俣宿を通ったので、それを記念した「琉球使節通行記念燈籠」の碑が墨俣の津島神社・秋葉神社に現在も立っています。

天保3（1832）年に稲葉宿（現稲沢市）に泊まった一行は琉球人 97 人を含めて総勢は 790 人でした。一行の行列図（名古屋市鶴舞中央図書館所蔵）が残されていますが、正使は輿に乗り、副使は駕籠に乗っています。「金鼓」と書いた旗を 2 本掲げ、楽隊 8 人が楽器を演奏しながら従っています。

天保3年の一行はトラブルが続いた旅でした。6月13日に、正使の豊見城王子朝春が薩摩で死去しました。そのため部下が豊見城王子を名乗り、正使となりました。9月25日にも部下が伏見で死去して、同地の黒黒寺に葬られました。

さらに同年11月4日に楽師の富山親雲上梁文弼が稲葉宿（現稲沢市）東町山田藤吉方で病死しました。遺骨は鳴海宿まで運ばれて、鳴海の瑞泉寺（曹洞宗）に葬られました。瑞泉寺には「琉球國 来應院即心是空居士」と刻まれた墓石が現存しています。この年には他にも亡くなった人が居られます。悪性の風邪が流行ったのが原因とされています。



瑞泉寺にある富山親雲上梁文弼の墓石